

## 「アンティオキア教会、エルサレム教会を援助する」 2016年05月24日

使徒言行録 11章 27節～30節。そのころ、預言する人々がエルサレムからアンティオキアに下って来た。その中の一人のアガボという者が立って、大飢饉が世界中に起こると“霊”によって予告したが、果たしてそれはクラウディウス帝の時に起こった。そこで、弟子たちはそれぞれの力に応じて、ユダヤに住む兄弟たちに援助の品を送ることに決めた。そして、それを実行し、バルナバとサウロに託して長老たちに届けた。

アンティオキア教会は異邦人の信者を加えながら、成長していった。その頃、預言を語る人々がエルサレムからアンティオキア教会に下って来た。その中に、アガボという人がいて、彼は“霊”によって、世界中に大飢饉が起こると予告した。世界中とは「人間の住む世界」という意味で、ここではローマ国内を指している。アガボの予告は的中し、クラウディウス皇帝の在位、47年から48年にかけて、大飢饉がパレスチナ地方を襲った。

この時、アンティオキア教会員はそれぞれの力に応じて、「ユダヤに住む兄弟たち」、即ちエルサレム教会の信者たちに援助の品々を送ることに決めた。この援助を実行するに当たり、バルナバとサウロに託して届けることにした。初代教会時代から、貧しく窮している人々を助けることを信仰の証しとして実践していたのである。

この時は大飢饉の援助であった。その後、大きな問題になったのは、エルサレム教会の信者たちがユダヤ教徒から迫害を受けていた時のことである。迫害はまず生活権を奪うことから始まり、最終的には命を奪うものへと進んでいく。信者たちは生活権を奪われ、生活に窮していた。この時、サウロは誰よりも先に、エルサレム教会を支援したいと思った。サウロが開拓伝道をして立てた異邦人教会に献金依頼をしている。ローマ書 15章 26節、27節で「マケドニア州とアカイア州の人々が、エルサレムの聖なる者たちの中の貧しい人々を援助することに喜んで同意したからです。彼らは喜んで同意しましたが、実はそうする義務もあるのです。異邦人はその人たちの霊的なものにあずかったのですから、肉のもので彼らを助ける義務があります」と、異邦人教会はエルサレム教会から霊的なものを受けたのだから、彼らの生活を支える義務があると勧めている。コリント書(二) 8章 9節 bには「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた」と、主イエスの貧しさによって、あなた方は豊かになったのではないかと訴えている。更に、8章 13節～15節で「あなたがたの現在のゆとりが彼らの欠乏を補えば、いつか彼らのゆとりもあなたがたの欠乏を補うことになり、こうして釣り合いがとれるのです。『多く集めた者も、余ることではなく、／わずかしか集めなかった者も、／不足することはなかった』と書いてあるとおりです」と、言葉を尽くして献金を依頼している。苦難の中にあるエルサレム教会を支援したい篤い思いが伝わってくる。サウロは誰よりも援助することに熱心であった。

そして3回目の伝道旅行後に、サウロは自ら、異邦人教会からの支援金を持って、エルサレムに行っている。ユダヤ教ファリサイ派の人々がサウロの命を狙っているので、信者たちは必死に行くことを止めさせようとしたが、主イエスの名のためなら、縛られることばかりか死ぬことさえ覚悟していると言って、行った。そこで、リンチを受けて殺されそうになるが、ローマの千人隊長によって保護され、ローマに護送され、その地で殉教したと伝えられている。サウロのエルサレム行きは他の目的もあったのかも知れないが、貧しい人々を支援したために、命を奪われることになったと言える。